# 呉水交会刊「呉水交第十三号」（平成二十五年一月）より転載

くつろぎコーナー

## 狐族の大移動

―父・角増涉の民話集から―

一般会員　角　増　正　裕

父・角増涉は昭和十八年四月から二十年三月まで呉上成黄校長が昭和十九年三月に創設した海兵科学校の技工士として予備役公した。高等小学校出から入隊りしたが、昭和二十四年八月、新制広島大学第一期生となり平賀春二教授に深甚なるお世話などをしていただいた。広大修学後はずっと江田島町内の小中学校教諭として勤める一方で、江田島の民話集を纏めて刊行している。それらの発表された文章のほか、父が唯一呉学校について取り上げている民話を紹介したい。

++++++++++

ひかし、ひかし、江田島や能美島の山に、狐がたくさん住んでいた。

その狐族の大親分が旧海軍兵学校―現在の海上自衛隊第一術科学校―八方園神社境内近辺を根城としていた。

狐について話をしてやろうのう。

狐の巣穴は、土が柔らかい場所でないと自分では掘らんで自然の穴やアナグマの穴などを適当に広げて使うんと。大きな穴になると長さが十五米もあるんよ。入口は一個ないし数個で、あいた穴が見つからんとアナグマの使っている穴へ入りこみ、中に放尿したり待伏したりするんで、そうしたらアナグマは巣穴にたまりかねて穴を捨てるのよ。ほいじゃが、アナグマやタルバガン、アナウサギなどとしばしば一緒の穴に住むことがあるんで。

狐の子は灰褐色の縞状の毛でおおわれ、目が閉じているが八―十日で開く。メスは一ヶ月間穴に入ったまま育児に専念するのよ。この間は、オスがえさを運ぶんで、四―五週間たつと、子は穴の外に出て遊んだり食物をとったりしはじめ、八―十週で離乳する。子は夏じゅう両親について狩物のとらえ方を教わるが、秋になると親から離れ、めいめいが行動圏を定める。その後は、両親もわかれわかれになるんで。

食物はウサギ、ネズミ、リス、鳥、カメ、ヘビ、カエル、魚、カニ、貝、昆虫などのほか、果実もかなり食べるよ。

夜行性で動作がすばやく、多少は水にものばれるし、およぐこともできる。猟犬に追をつけられると水にはいったり、木にのぼったり、猟方にとんだり、全身に下肥をぬったりして臭いを消そうとする。

狐の習性について、あれこれ言ったがのう。じつは明治十九年六月一日のことよ。江田島本浦の一部を海軍兵学校とするため、五人の視察団が島にやってきた。子狐は、親に育てられていたころでのう。もちろん、メス親は巣穴付近にとどまっていたで。

オス親たちは、集まって悩んでいたのよ。



「海軍兵学校が、狐族の悲元来、ずっと住んでいた地に、移転することになったげな。なんとしても、くいとめなければならん。どがあにしたら、ええもんじゃろう」

「どがあなことしてでも、狐元からうけついだものじゃ。吠らい着いておかにゃあ」

「わしら狐族は、古来人に知られた、だます力をもっておらあ。ばかしゃげても、動かんで。稲荷神の使いといわれているほどじゃけん」

「夜の行動力で驚かしてやろうわい」

「わしがもっているありったけの力で、できるだけ人間どもを、いやがらせ、海軍兵学校が、わしらが住んでいるところへ、移転するのを、思いとどまらせてやろうわい」

「そうだ。そうだ。がんばらなくっちゃ」

めいめいが、それはそれは一生懸命にもてる力を出しきってがんばった。

ところが明治十九年十月一日には、移転のため着工し、ダイナマイトで爆破をはじめ、鉄砲でうたれて二三匹の狐が命を落とした。

小用の小倉（現在の変電所辺）に大親分は代表を集めた。

「残念でたまらんがのう。軍隊いうて、鉄砲を持っているやつらにゃしようがない。移動せにゃならん。これ以上、狐族の仲間を死なすわけにゃいかん。考えに考えた末じゃが、本土に上陸しようわい。そこにゃ広々とした山、たくさんの住み地や食物がある。祖元、子孫のため、現在のわしにゃ大親分の責任もあるけん、狐族を絶やさない責任があるで。みんなわかってくれようがい。新天地を求めて行こうや。わしも心じゃ痛がゆうて泣いちょるんで」

「……」

沈黙がしばし続いた。狐族だわ、月光を反射した、爛爛にもっ……。



「さんせい。しかたがないです」

時代の移り変わりをとらえ不平不満もあろうが、泣きの涙でそうすることにした。代表はそれぞれの住み地に帰り、わかりやすく、熱っぽく説明した。ほんとうに。そりゃあ右狐の反抗も買ったよ。でも、しかたがない。いよいよ、大移動と決定、強行となった。

狐族は、種の重っぽを頭にしぼりつけ、渡だちして、悪い思いに化け、子供はそれぞれ狐や木の葉をかぶせ声を出さないように口に鎖をかませて、大親分の分を下、明治十九年十月十八日、秋月へ、秋月へと進んだ。

その頃秋月近には、大きな動をもっている家は二軒あった。



「こんばんは、こんばんは」

トントン、戸をたたいた。

「どうしたんない」

「船を出して、吉浦に渡して下さいや」

「だめ、だめじゃい、ねむい、ねむいわい」

一軒目ではことわられた。

二軒目でことわられたら、こりゃ大変なことだう、あとは、船をもっている家がない。

「きれいな娘さんに化けろ。声がきれいで娘に似た狐よ」

「人間、小判をつめた箱を用意しろ」

二軒目では必死の思いだった。もう戸を開けて、娘に化けた狐が入り込み、大判小判を入れた箱を開いて見せた。

「私は吉浦にいるおばさんが先にかけています。どうか助けてください。これ、このとおり、お礼はたんまりはずみます」

ねむそうな顔に、あんとんのうす明かりの中に、きれいな娘のはじらい、艶気にみちた風、涙しむ姿、顔もさめるピカピカの大判、小判。

「よし、行こう。行こうわい」

大きな声に、狐第一行は船にのり、静かな海に、ぬちょろの波音は月光をはね、静かに然も音々しく吉浦に着いた。

「船頭さん、ありがとよ」

夜は白々と明けはじめた。狐族は、吉浦の家路をぬって、吉浦山へと急をいそぎ、こそこそと入った。

船頭さんが秋月に帰って見ると大判小判は、木の葉っぱだった。でも秋月人はだまされても、やあち、ごうどのう。狐族の本州での生存繁栄を祈るものばかりだった。

情報げを入れた狐うどんを食べるとき、えり巻の狐毛を巻くとき、何がしら、江田島のにおいが、心なしかする。

（ろうと江田島―江田島の民話　角増涉編著から）

### あとがき

明治二十一年八月一日に、海軍兵学校が東京築地から移転し、幾多の変遷を経て第一術科学校、幹部候補生学校となっている。加えて、水路堆や弾薬庫、射撃場、飛行場にと江田島の国有地は順次拡大し、現在でも平地に国有地の占める割合が高くなっている。

江田島のいや日本の誇りである「世界の海軍兵学校」の移転スケジュールは次の通りで、現在の基準と比べて著しくスピードに驚かされる一面がある。

明治十九年六月一日　視察団来島

同年八月十五日　兵学校用地引渡し

同年十月一日　土木工事着工

基地整備のためとはいえ、追われていく農民の姿を、狐族が江田島弁でユーモアたっぷりに語り聞かせているようだ。

（ひろさか郷土研究所勤務）